文　法（史的研究）

金　水　敏

はじめに

本稿を成すにあたって、該当する論文をざっと数え上げると、一八〇編あまりとなった。「展望」の主旨に鑑み、できるだけ研究の大きな動向を浮かび上がらせるようにするという方針を採った結果として、多数の優れた論文について言及することができなかった。取り上げる論文の選定にあたっては無私・公平を心がけたと言いたいが、私自身の好み、くせ、個人的な思い入れ等を完全に排し得ているかと問われると、自信がない。単なる筆のすべりということもあるかもしれない。ともあれ、現在私のなしうる限りのことはさせていただいたということで、論文ご著者ならびに読者各位のご海容を乞いたい。

なお、取り上げた論文にはそれぞれ著者名、論文題名、所収雑誌名、巻号、発行所、発行年等の情報を付した。ただし次の論文集については、略号によって示すことにする。

小林記念　『小林芳規博士退官記念　国語学論集』小林芳規博士退官記念会編、汲古書院、平成四年三月

辻村記念　『辻村敏樹教授古希記念　日本語史の諸問題』辻村敏樹教授古希記念論文集刊行会編、明治書院、平成四年三月

藤森ことば　『藤森ことば論集』藤森ことばの会（代表　大塚光信）編、清文堂出版、平成四年十月

文化言語学　『文化言語学　その提言と建設』文化言語学編集委員会編、三省堂、平成四年一一月

鶴久記念　『鶴久教授退官記念　国語学論集』鶴久教授退官記念論文集刊行会編、桜楓社、平成五年五月

小松記念　『小松英雄博士退官記念　日本語学論集』同編集委員会編、三省堂、平成五年七月

松村喜寿　『国語研究』松村明先生喜寿記念会編、明治書院、平成五年十月

以下の節で、テーマ別に分類しながら研究動向を探って行きたい。

係り結び

係り結びの問題は、近世国学から受け継がれた、国文法における最も古い研究テーマの一つであるが、今期、新たな段階に立ち至ったと言える。それは、大野晋『係り結びの研究』（岩波書店、平成5。

以下、大野『研究』とする）および阪倉篤義『日本語表現の流れ』（岩波セミナーブックス45、岩波書店、平成5。以下、阪倉『流れ』とする）という、文字どおり大家によるまとまった論考が出版されたからである。両著の特徴は、「係り結びとは何か」という本質的な問題に正面切って取り組んでおられることで、あとに続く研究者にとってまことにありがたい指針となる。それぞれ、本誌においても相応の書評が準備されているはずで、多言を費やす必要はないと思うが、本稿なりの観点から位置づけをしておきたい。

まず大野『研究』は、標題どおり係り結び現象の統一的解明のみに焦点を絞った大著である。著者は係り結びを、「英語・ドイツ語などと根本的に相違する」日本語の文構造の表示形式であると見る。それは、格とは独立した「題目―述部」構造の表示である。係助詞のうち、「は、も、こそ」は題目の表示に関わる。そして「ぞ、なむ、や、か」は本来文末にあって、陳述のさまざまな変容を示していたものが、強調のために倒置されたと考える。さらに、係助詞は「疑問詞を承けるか承けないか」という観点によって二分される。つまり「は、こそ、なむ、や」は疑問詞を承けないグループ、「も、ぞ、か」は疑問詞を承けるグループである。この現象は、承ける語が「確定・既知・旧情報」に属するか、「不確定・未知・新情報」に属するかという違いを反映するものであると見る。これら、二つの独立した軸によって係助詞が大きく四つに分けられるという「発見」に基づいて、さまざまな現象が処理されていくのである。この二つの軸は、狭義の係り結び崩壊後の現代語にも、「は（題目・旧情報）」対「が（述部・新情報）」という形で受け継がれているという。

一方の阪倉『流れ』は、「語彙の変遷」「条件表現の変遷」「疑問表現の変遷」「「係り結び」の成立と変遷」という四つの主題を柱としている。条件表現と疑問表現は既発表の論文をもとにしているが、語彙（主として単音節名詞を扱う）と係り結びは、「かねがね考えながら今回はじめて纏めたもの」であるという。本書の最大の目的は、古代語から近代語に向かって、情意的・場面依存的な表現から、より分析的な表現、論理の明晰な表現へと変化していくという方向性が、四つの問題に共通して見られることを示すことにある。本書において係り結びは、文法的「法則」ではなく「修辞」の側に属する問題として扱われる。「ぞ、なむ、や、か」の結びが連体形になるというのは、もともと「擬喚述法」＝連体形終止の文が持つ、疑問、嘆き、説明等のモダリティに対応して、その文の焦点を卓立するためにこれらの助詞が投入された結果であると説明する。

両書それぞれに持ち味があり、また構成や目指すところも異なるわけで、軽々に優劣など論じられるものではないが、少なくとも係り結びの起源・成立論に関しては看過できない対立を示している。私見では、大野『研究』における倒置による起源の説明は、必ずしも成功していないように思われる。氏は、「天地の固めし国そ　大倭島根は（万葉四四八七）」のような名詞述語文の倒置から類推して、「今そ　なぎぬる（万葉二五七九）」という形式は「なぎぬる（ハ）今そ」という文型を起源に持つと模式的に述べはしているが、実際にその実例を挙げている訳ではない（大野『研究』一九七～二〇二頁）。さらに、「なぎぬる（は）今そ」という文が実際にあったとして、これはいわゆる分裂文に相当すると考えられるが、後に引く近藤泰弘論文に見るように、疑似分裂文はある種の有標性を持っており、「今そなぎぬる」と「なぎぬる（ハ）今そ」のどちらがどちらの起源であるか

ということは、一概には言えないのである。

また、疑問詞の分布に着目した点は新見であると思ったが、そのことと各助詞の係助詞としての性質とがどのように結びつくのかという点については、すんなりと頭に入った訳ではなかった。たとえば「も」が「未知・不定・新情報」の「題目」を提示するというが、「新情報」の「題目」とはいかにも分かりにくい概念である。

ところで、大野『研究』では、係助詞を「題目」とか「旧情報」とかいった、上接語の情報的価値の表示形式として見る傾きが強かったが、小川栄一「情報構造としての係結び」（『国語国文学』32、福井大学、平成5）では文字どおり、筆者の定義する「情報構造」を係助詞が表示していると述べている。大野『研究』では「か」は疑問詞を承け、「や」は承けないとしているが、小川論文では少数ではあるが疑問詞を承ける「や」があり、かつ「や」のあとに疑問詞が現れる場合、連体形終止で結ぶ確例がないことを指摘している。

一方、阪倉『流れ』において、擬喚述法、つまり喚体的な文に係助詞が投入されるという説明であるが、係助詞があることによる二分的な構造は、もともと喚体と呼ばれるところのものとはずいぶん違うものなのではないかという疑問が湧いてくる。用語・概念の整理も含めて、検討の余地は無いだろうか。この点に関連して、係助詞を含む文の構造について考察した興味深い論文があった。佐佐木隆「上代語における「―か―は―」の構文」（『国語国文』61-5、京都大学、平成4）である。万葉集で、「か」のあとでは主語表示に「は」が現れず、「の」または「が」で表示されるという現象に基づく考察で、「か」の後から文末までが準体句相当の一体的な句を構成するために、「は」が現れ得ない（著者は「は」が「の・が」に「ふりかえられる」と説明している）とするものである。なお、「や」については「か」と同様の状況であるが、「ぞ」の場合は「―ぞ―は―」という語順も相当数見られる。これは、強調のために「ぞ」の句が文頭に倒置されたものと著者は述べている。

阪倉『流れ』でも触れられていた、文全体が背負わされるモダリティと係助詞との関係という点で、川岸克己「係助詞ヤ・カにおける対他性について」（『学習院大学国語国文学会誌』36、平成5）が注目される。しばしば「や」について「問い（かけ）」という意義付けがなされるように、「や」そのものの「本質的意義」に対者に向かって問いかける「対他性」があるように記述されることがあるが、その妥当性について検討している。源氏物語を主たる対象とし、対話・心内語における分布や待遇性について検討した結果、対他性は「や・か」自身の本質的意義ではないと結論している。現代語研究を援用しながら分析を進める手際のよさに、近年の傾向が伺えた。

半藤英明「古典に於ける慣用句的「こそ」の働き」（『國學院雑誌』93-11、平成4）では、係り結びを構成しない「呼び掛け」「さればこそ」「否定」等の慣用表現に用いられる「こそ」が狭義係助詞「こそ」と同一語であることを主張している。係助詞の本質を探るためには、これらの周縁的用法に目を配る事も重要であろう。

安田章「コソの領域」（『国語国文』61-1、京都大学、平成4）は一六〇〇年頃の衰退期における、「puro ornato（単なる飾り）」的な「こそ」の一用法の実態を文献から丹念に洗い出している。

準体句

今期、古代語の準体句をめぐる論考に充実した成果が得られた。

近藤泰弘「古典語の形状性準体構造をめぐって」(『小林記念』平成4)、信太知子「『万葉集』における連体形準体法とク語法――句構造の観点から――」(『小松記念』平成5)、山口堯二「古代語の準体句構造」(『国語国文』61-5、京都大学、平成4)等である。これら中でも重要であると思われるのは、近藤「古典語の形状性準体構造をめぐって」であろう。本論文の狙いは、石垣謙二の「作用性用言反発の法則」を直接の出発点とし、石垣論文に欠けていた奈良時代～平安初期のデータを補いながら、その今日的な再解釈を果たそうというものである。石垣論文は国語学には希有な本格的統語論であり、それ故に学会においては発表後三十年以上、名のみ知られながらまともに取り扱われることがほとんどなかったのであるが、ようやく時代と人を得て、その真価が問われる場面に至ったのだと思う。

近藤論文では、石垣論文に倣い、準体句をまず作用性準体(「～こと」「～の」に相当)と形状性準体(「～もの」「～ひと」等に相当)に分類する。準体は狭義の連体形準体法だけでなくク語法も加えて考える。次に、準体内の述語用言と主節の述語用言のアスペクトに着目し、状態性、非状態性、自由(前二者を区別しない)に分類する。そしてこれらの分類に基づいて、次の点を明らかにした。「奈良時代から平安初期にかけての主語としての準体においては、形状性準体とは、〈連体形＋い〉と〈ク語法〉あるいは〈連体形＋は・が・ゆ〉とで分担されており、明確に区分される」「奈良時代と平安時代とで、それぞれに違う規則が支配してはいるものの、形状性準体が主語になる場合だけに、特殊な構文の制限が起こる」。そして、その制限とは、「奈良時代ではク語法が使えず、助詞「い」が必ず必要になる」「平安時代では、石垣の第二則により必ず状態性アスペクトが必要」というものである。また、「分裂文の主語は奈良時代においては、形状性準体と作用性準体の混合した性格を持つ」ということも述べている。以上の分析を総合すると、結局、主語と目的語の準体句は「A主語となる形状性準体」と「Bその他すべての準体」に分類できる。そしてこれは「動作主になりうる準体とそうでない準体とを分類している」と筆者は見ている。

論証がやや性急で、また状態アスペクトの意味付けが課題として残されるなどさらなる検討が必要であろうが、近藤論文は複雑な統語現象をあざやかに「動作主対非動作主」という単純な述語の意味構造に還元して見せた。石垣を引き継いで、歴史統語論とでもいうべき分野の確立へ、一つの指針を示していると思う。

「の」「が」

前節の統語構造の議論とも深く関連するが、いわゆる主格表示および連体修飾の「の」「が」についても検討に値する新見が示された。山口堯二「古代語ノ・ガの関係表示」(『国語と国文学』69-11、東京大学、平成4)、野村剛史「上代語のノとガについて(上・下)」(『国語国文』62-2・3、京都大学、平成5)等である。

山口論文では、「ノの関係表示…連語的・文脈依存的」「ガのそれ…統率的・明示的」であったとする。また、「の」「が」が連体語表示・主語表示にまたがっていた現象を「連体関係を基本的な成分関係とする喚体的な句構成と、主述関係を基本的な成分関係とする述体的な句構成との、相互交渉を保ちながらの分化を反映した振る舞いであろう」としている。野村「上代語のノとガについて」も山口論文と同様に、「の」「が」の起源を連体用法に限定せず、連体と連用と

にまたがる「体言の原始的修飾語化の助詞」と規定する。修飾語であるがゆえに、述部と強く対立する事なく、むしろ述語と一体となって連体修飾節、準節条件句等を構成する。前述の佐佐木論文が提示した「―か―の・が―」構文も同様である。この述語との対立の強弱によって、ハのような係助詞との分布の差が生じるとするのである。さらに「の」と「が」の機能や上接語に対する制約の差異は、「の」の修飾の「一般的」ともいうべき「広さ」に対し、「が」が「主体性の強い状態言に呼応してその実体性をあらわにする特殊な修飾語化の助詞」であるという「狭さ」を想定することによって説明できるとしている。ここでは、明晰な論理学的・存在論的考察が違和感なく古代語の意味論的世界を切り開いている。

ところで、近藤泰弘「古代語の文構造――格助詞から接続助詞への変化――」（『国文学　解釈と鑑賞』、58-7、至文堂、平成5）では、石垣謙二『助詞の歴史的研究』にそって、格助詞「が」から接続助詞「が」への変化を統語構造と意味の両面から考察している。一方野村剛史「古代から中世の「の」と「が」」（『日本語学』12-11、明治書院、平成5）では、前半に先の「上代語のノとガについて」の要約を述べ、後半に主格助詞「が」成立の要因に関する試論を提出している。ここで興味深いのは、原始修飾語化助詞から主格助詞への変化の直接の契機となったのが、後に接続助詞化への契機ともなった「～の～連体形」、つまり近藤の言う形状性準体ではなかったかとしている点である。その理由として、「～の～連体形○終止形」の「○」の位置に主格表示の助詞を挿入して、無印の用言の連続を避けようとすると言うのである。本論文ではケーススタディとして『宇治拾遺物語』を取り上げ、「～の～連体形○終止形」の「○」が無助詞になるのは大部分が「あり」で終わる文であり、それ以外では「が」が入るほうが優勢であると述べている（糸井通浩「人物提示の存在文と同格準体句――宇治拾遺物語を中心に――」〈『藤森ことば』平成4〉も参照のこと）。

我々はここで再び、近藤「古典語の形状性準体構造をめぐって」を思い出さなければならない。「無印の用言の連続を避けようとする要求」を生じさせた環境とは、まさしく石垣の第二則が働く「A主語となる形状性準体」であった。つまり、近藤論文と野村論文の仮説が正しければ、動作主となる（可能性のある）節をマークするための石垣の第二則が、アスペクト法則だけではなく、主格助詞まで生み出す力になったということになる。こう考えると、「あり」に限って無助詞が多いという点も符合するのである（「あり」の主語は動作主ではない）。

なお、さらに時代が下ると、準体助詞「の」の成立によって結局「無印の用言の連続」そのものがすべて「栓」をされてしまうわけであるが、この準体助詞の成立について考察した論文として、山口堯二「準体法の推移と準体助詞「ノ」の形成」（『大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）』41、平成5）および柳田征司「「の」の展開、古代語から近代語への」（『日本語学』12-11、明治書院、平成5）があった。

格関係

動詞とその項との格関係について考察した論文がいくつかあった。岩下裕一「「頼む」と「に」格」（『近代語研究』9、近代語学会編、武蔵野書院、平成5）、鈴木英夫「「（人）とあう」という言い方の成立について」（『近代語研究』9、近代語学会編、武蔵野書院、平成5）、柳田征司「「修行者あひたり」型表現の由来」（『文化言語学』平成4）、

山本真吾「平安時代に於ける動詞「をしふ（教）」の意味用法について――訓点資料の用例に注目して――」（『訓点語と訓点資料』92、平成5）等である。

山本論文は、「［相手・人］に［内容・物事］を教ふ」は仮名文学作品、「［相手・人］を教ふ」は訓点資料に見られることを指摘し、同一語形の動詞の結合価や意味が資料の位相によって変異を持ちうることを示した。これは、見方を少し変えれば、中国語という外国語の文法関係が日本語に影響を与えた一つの具体例と見る事ができよう。鈴木論文は、時代は変わって、近代における漢文訓読や欧米語の翻訳が動詞の結合価の変化を促したと考えられる例の考察である。ただし「会う」の場合、直接的に影響を受けた訳ではなく、「（人）に語る」に対する「（人）と語る」が漢文訓読の影響から生まれ、欧米語の翻訳を通して補強されたことによって確定したニ格とト格の使い分けが、「（人）と会う」を生みだしたと結論している。

柳田論文は古代語で「（相手・人）に会ふ」と「（相手・人）（が・は・φ）会ふ」という二種の格体制があることについて考察し、前者が意志的に会う表現、後者が偶然出会う表現であることを示した。従うべき結論であると思う。私見によれば、例えば「立つ」という自動詞が、意志的に立つ動作を表す場合と、ものが自然に立つことを表す場合とで語形を区別しないのと平行的な現象であろう。つまり、三上章の言う「能動詞・所動詞」、近年の生成文法で言われる「非能格自動詞・非対格自動詞」の対立である。近藤泰弘「日本語における異主語省略と能格性」（『松村喜寿』平成5）もこの問題に触れている。

ヴォイス

可能表現について、大きな論文が公表された。渋谷勝己「日本語可能表現の諸相と発展」（『大阪大学文学部紀要』32・第1分冊、平成5）である。氏の博士論文に手を加えたもので、現代語の理論的研究をふまえ、文献、方言の両面にわたるバランスのよい記述に成功しており、真の意味で包括的研究と呼ぶにふさわしい、二六二頁に及ぶ大作である。これも、国語学では新しいタイプの論文と言えるのではないか。同氏による「意味の縮小と文体差――可能の補助動詞エルをめぐって――」（『近代語研究』9、近代語学会編、武蔵野書院、平成5）もある。

金水敏「欧文翻訳と受動文――江戸時代を中心に――」（『文化言語学』平成4）は、「（人）によって～（ら）れる」という形のいわゆるニヨッテ受け身文が近世のオランダ語直訳文に直接の起源を持つ事を実証した論文である。これも、外国語の影響による国語の変容の一例ということができるかと思う。

敬語

尊敬の「る・らる」の起源を具体的に検証した画期的な論文が二件登場した。大坪併治「漢文訓読文で「見」をル・ラルと読む場合の一考察（上・下）」（『国語国文』62-4・5、京都大学、平成5）および辛島美絵「「る・らる」の尊敬用法の発生と展開――古文書他の用例から――」（『国語学』172、平成5）である。両論文は、尊敬の「る・らる」が自発ではなく受け身の「る・らる」から派生したと見る点、成立時期を平安初期とする点等、いくつかの共通点を持つが、その成立事情に関して、見解を異にしている。

大坪論文は、漢文訓読文における「見」字の訓読から尊敬の「る・らる」が生まれたとする。つまり、「見」字は普通の受け身に用いられる一方で、会話文や心話文で主として下位の話し手が上位の聞き手に向かって「私ヲ、または私ニ……シテ下サイ」と請願する場合に用いる用法が存在する。後者の「見」字を前者と同様に「ル・ラル」と訓むと、敬語としての解釈が生じる。ここに、「る・らる」の敬語化の契機があった、と考えるのである。一方辛島論文は、古文書における「被」字の用法の中から「る・らる」が生じたとする。それは、古文書では「差出人＝下位者ガ、宛先＝上位者ニ……サレルコトヲ差出人ガ欲スル」のような文脈がその性質上非常に多く、また主語や補語の省略が頻繁に起こるため、書き手が受け身のマーカとして「被」字を使用したとしても、読み手の立場でそれが尊敬のマーカとして解釈される可能性が高くなることによるという。

両説のどちらが正しいと判定を下すのはむろん本稿の目的とするところではない。派生の契機を一つに限定する必然性も、あるいはないのかもしれない。第三、第四の契機がないということも決して言い切れないのである。むしろここで注目したいのは、両論文が偶然にも共通して指し示していることである。それは「見」字と「被」字との違いはあれ、尊敬用法を生んだとする文脈が両者とも「相手の話し手・書き手に対する行為の請願」という点でほとんど同じであったという点である。言われてみれば、敬語というきわめて機能的な用法が、対者に向かっての請願のような場面にこそふさわしいことは当然すぎるほど当然な話であるのだが、それが観念的に想像されているのではなく、資料の丹念な解析に基づく主張であるだけに、重みがあるのである。特に辛島論文では、会話の描写ではなく、文書自体が現実のコミュニケーションの媒体として生きて用いられる中で言語変化が促されたと主張されている訳で、ヴィトゲンシュタインの言う「言語ゲーム」が目の前で展開されるような生々しさがある。また大坪論文の場合は、尊敬語の「る・らる」が「翻訳語法」であると見る点が興味深い。

他に、古代敬語を硬直した体系としてでなく、柔軟で動的な運用を許す形式として見直す試みが目立った。西田直敏「訓点資料の「自敬表現」について――「敬語コード」・「敬語メッセージ」による敬語史的解釈」（『松村喜寿』平成5）では、ヤコブソンの「コード・メッセージ」を拡張し、具体的な発話としての「敬語メッセージ」に対し、メッセージを生成・解釈するための社会化されたシステムとしての「敬語コード」を想定することが有効であると主張した。すなわち、宣命・万葉集・訓点資料等におけるいわゆる「自敬表現」が自然で有効な敬語メッセージたりえたのは、仏や王の発言の自敬表現に肯定的な価値を与える「王者のことばコード」が存在したからだというのである。興味深いことに、森野宗明「父親の息子に対する待遇――平安時代の仮名文学作品を中心にして――」（『小松記念』平成4）でも、「待遇コード」ということばを用いて、平安貴族社会における父の子に対する待遇表現（主として二人称代名詞）の複雑微妙なありかたを解きあかしている。例えば、「私の「家」の秩序原理に則る待遇コードと、公の「朝廷」の秩序原理に則る待遇コードをどう使い分け調和させるかが分別の分岐点となる」といったように。

川上蓁「かしこまらせる尊敬語」（『國學院雑誌』94-4、平成5）は、例えば「たまふ」を「たまはらす（イタダカセル）」の意味で用いていると解釈する事で、上下尊卑関係の異例を説明できるだけでなく、

行為の受け手にかしこまった態度を要求するというニュアンスが読み取れる場合があることを指摘するものである。根来司「謙譲語から見た源氏物語の文章」（『国語と国文学』69-11、東京大学、平成4）では、光源氏を動作主とする謙譲語で上下尊卑関係の異例を見ると、光源氏の女性に対する細やかな心遣いが読み取れると主張している。井上親雄「「位格」を示す敬語――平安時代物語の待遇表現――」（『小林記念』平成4）では、敬語の用法の一つとして、物語の地の文で語り主がある人物の社会的位置について認識したことに基づいて適切な待遇をするために用いるものがあるとし、これを「位格を示す敬語」と称している。同一人物に敬語が用いられたり用いられなかったりするのは、人物の位格に関する語り主の認識の変化を表すものとするのである。

テンス・アスペクト

平安時代のテンス・アスペクトに関して、画期的な著作があった。鈴木泰『古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析――』（ひつじ書房、平成4）である。内容については本誌一七六集に私の拙い書評が掲載されたので参照していただくとして、鈴木泰「古代語の文法現象」（『国文学　解釈と鑑賞』58-1、至文堂）において著者自ら、自著の分析の問題点を総括しており、貴重である。奥田靖雄氏が現代語の動詞について「スル〈非過去・完成相〉／シタ〈過去・完成相〉／シテイル〈非過去・継続相〉／シテイタ〈過去・継続相〉」というパラダイムを示し、形態とテンス・アスペクトの意味・機能との緊密な相即が見られることを示して以来、半ば定説化した感があるが、同様の分析法を源氏物語に適用した場合、基本形やリ・タリ形等でさまざまな不相即が観察されるというのである。この「不相即」が、資料の示す体系の不安定性・過渡性を示すのか、あるいは分析法そのものの限界を示すのかという点に関して、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

鈴木論文を代表格として、今期はテンス・アスペクト関係の論文が多かった。例えば『国文学　解釈と鑑賞』（58-7、至文堂、平成5）ではテンス・アスペクト特集を組み、佐伯梅友・鈴木泰・鈴木康之・松本泰丈「座談会　新しく語る源氏物語の文法」他、七件の論文を掲載している。その他の雑誌・論文集にも目立ったが、中でも「ゐる・をり」「～ゐる・をり」「～てゐる・をり」等の形式に言及したものが、管見に入ったものだけで八件を数えた。しかし、多くの論文が公表される中で、次第に満たすべき水準が従来とは変わってきているように思われる。一例を挙げると、状態性のアスペクトの意味を「進行態」と「既然態」の二つに分類しているだけのものはもはや古いタイプの論文で、読んでももの足りず、極端なことをいえばあまり役に立たない。アスペクトの体系は、基本形も含めた各時代での形態的対立のもとで考察されねばならず、特定の意味的カテゴリーを予め定めて資料を見ても、結局何も分からないのである。また古代語「ゐる」を現代語「いる」と同一視して「～（て）ゐる」だけで状態性の意味が表せるように書いている論文が見られたが、これも問題がある。今や、動詞のアスペクト素性をかなり精密に把握しておかなければ、テンス・アスペクトの論文は書けない時期に来ていると思う。（むろん、知っていて「かっこにくくる」研究はあってもよいが、それは「知らない」こととは別である）。

特色の見られた論文をいくつか見ておく。堀口和吉「助動詞「～ぬ」

「〜つ」弁」（『山辺道』37、天理大学、平成4）は、〈動作動詞〉対〈変化動詞〉という分類と交差して、継続態を持つ〈継続動詞〉、持続態を持つ〈持続動詞〉という分類を加えることを提案し、「〜ぬ」は〈変化の実現〉に加えて〈継続態の実現〉を、「〜つ」は〈動作の終了〉に加えて〈持続態の終了〉を表すとすることで用例のすべてを処理できると主張するものである。きれいな説だけにじっくり妥当性を検証してみたいところである。さらに、時代による変化との関係も知りたい。吉田茂晃「「存続の助動詞」考――万葉集の「り」について――」（『万葉』147、万葉学会、平成5）では、「り」と現代語「〜ている」をともに「ことがらについての《既実現＝存在》性を語るもの」ととらえた上で、それぞれの表現が実現するニュアンスの偏りについて検討している。金水敏「状態化形式の推移補記」（『松村喜寿』平成5）では、「をり」の衰退を「〜り」の衰退と同根の問題として捉え、中山昌久氏の動詞形態論を援用して説明を与えた。来田隆「キルとヲリ――一韓の抄物から――」（『小林記念』平成4）では、阪倉篤義氏が万葉集の「ゐる」と「をり」の用法に基づいて、前者が「存在の客観的記述」、後者が「存在の主体的描写」を表すとしたのを承け、この区別が抄物の「ゐる」と「をり」についても有効であることを主張している。近藤泰弘「丁寧語のアスペクト的性格――中古語の「はべり」を中心に――」（『辻村記念』平成4）は、さまざまな「はべり」の用法の中に、「あり」や「り・たり」の変容としての状態性の意味を持つものと、アスペクト的には中立で、敬語的な意味を与えるためだけに動詞等に付加されるものの二種類があることを実証した。TAKEUCHI, Lone "Long-term developments in the Japanese aspect-tense system : a case of linguistic drift?" (*Acta Orientalia*, School of Oriental and African Studies, London, 1993)は、広範囲の現象に目配りの効いたテンス・アスペクト史の概観になっている。

ムードの助動詞等

ムードはもともと難しい問題なので、今期もさまざまなアプローチの論文が数多く生産された。特に目立った動向というのもないように思われるので、だいたい時代順で特色ある論文をいくつか取り上げたい。

久島茂「上代の「〜終止形＋ミユ」文の構造について」（『辻村記念』平成4）は、「みゆ」が「(1)連体形に接続する方が自然だと思われるが、なぜそうなのか。」「(2)終止形に接続するのはなぜか。その終止形の文法的性質は何か。」という問題について考察している。(1)は、準体法が未発達であったこと、(2)は知覚内容を表すために「積極的にテンスを欠いた形」としての終止形が意味内容にとって適切であったことを挙げている。テンス・アスペクトや統語構造に目配りの効いた、手堅い議論を積み重ねている。

高山善行「中古語モダリティの階層構造――助動詞の意味組織をめざして――」（『語文』58、大阪大学、平成4）では、統語構造の面から助動詞の階層性に関する仮説を提案している。現代語では常套化している作業だが、古典語で正面切って取り上げたものは案外なく、貴重である。階層的なアプローチの限界もわきまえながら、いい結果を出していると思う。

議論の絶えない「しづ心なく花の散るらむ」の解釈をめぐって、今期も論考があった。北原保雄「「らむ」留めの歌における既定と推量――原因などを推量する意味はどこから生じるか――」（『小松記念』平成5）で

は、「らむ」留めの歌のさまざまなヴァリエーションを既定の事実と推量部分の組み合わせから解きあかし、問題の歌は「光のどけき春の日（デアル）」と「しづ心なく花の散るらむ」というあい矛盾する既定の事態が並べられることから、原因・理由を推量する意味あいが自然に生じるとしている。山田潔「「しづ心なく花のちるらむ」考」（『國學院雑誌』94-4、平成5）では、宣長の「かなの意に通ふらん」の路線で、この主の「〜の〜らむ」は推量ではなく前件と後件の「背理矛盾（遠藤和夫氏による）」による「驚き」を表すとしている。前件と後件の対比を重視する点では両説は共通しているようである。

小松光三「体言に連なる助動詞「む」の表現――『枕草子』の場合」（『国語と国文学』69-11、東京大学、平成4）は、連体法の「む」とその主節との関係を考察しており、〈婉曲〉などとあいまいに扱われてきたこの種の「む」の理解にヒントを与えている。

田中雅和「和化漢文における「将・欲」と「可・当」等について――〈意志〉の意味・用法を中心に」（『小林記念』平成4）では、和化漢文の「可・当」（ベシ類とする）の〈意志〉の用法について調査し、和化漢文では和文に先だって中世以前にベシ類に〈意志〉の用法があったこと、和化漢文のベシ類は待遇上の上位者である言語主体が下位者にむかって自分自身の意志を直接に表明する場合に用いる点に特徴があること、などをあきらかにした。これは尊敬語「る・らる」に関する大坪論文、辛島論文ときわめて強い平行性を持った結論である。突き合わせて検討してみる価値がある。

菅原範夫「「うず」の消滅過程」（『小林記念』平成4）では室町末から江戸時代初期における「うず」の消長について検討し、「べし」との関連や丁寧表現としての性格に言及している。

土屋信一「「のだろう」以前――江戸語の「だろう」の用法――」（『小松記念』平成5）では、文化年間以前に「のだろう」という形は現れず、「だろう」が現代語より広い用法を覆っていたことを明らかにした。併せて、「ではないか」と「のではないか」についても考察している。また佐伯哲夫「ウとダロウの職能分化史」（『国語学』174、平成5）では、国定読本を資料として、「ウ群とダラウ群の職能分化は、ウ群のダラウ群への交替を柱に、独自のダラウ群の漸増を加えた事象」として捉えられることを述べた。両論文は、近代語の微細な言語史が現代語研究にも有効なデータを与えうることを示しているように思われる。

今期は、終助詞に関する議論が盛んになってきた。特に、柴田敏「終助詞カシのモダリティ」（『小松記念』平成5）、森野崇「終助詞「かし」の機能」（『辻村記念』平成4）、森野崇「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」（『国語学』168、平成4）、森野崇「奈良時代の終助詞「ぞ」について」（『国語国文』62-5、京都大学、平成5）等が充実していた。

動詞形態論

坪井美樹「平安時代における「命令形」の成立（『文芸言語研究』22、筑波大学、平成5）、同「上代特殊仮名遣の消滅と活用体系」（『小松記念』平成5）では、「形態の示差性」という概念を軸に、動詞の活用の変化の要因について精力的な検討を加えている。方言まで含めて、どれくらい普遍性を持った概念なのか、検証してみたいところである。釘貫亨「古代国語における動詞派生形態の歴史的変遷について」（『藤森ことば』平成4）では、動詞自他対応の三つのタイプの成立の先後関係を再構成し、併せて平安以後の動詞形態派生の方法との違

いについて述べている。大塚光信「上一・二段活用語未来形における「―ュウ」から「―ョウ」へ――オ段開合長音混同の時期と関連して――」（『藤森ことば』平成4）では、「―ュウ」から「―ョウ」への変化とオ段開合長音の混乱から混同への変化を並行的に捉え、おおよそ一五五〇―一六〇〇の五〇年間の間の出来事と推定している。坂口至「〈研究ノート〉助動詞ヨウの成立をめぐって、その後」（『筑紫語学研究』3、筑紫国語学談話会、平成4）も併せて読まれるべきであろう。屋名池誠「ある連音忌避」（『松村喜寿』平成5）では、動詞の末尾音節と次末音節（連用形で見る）に同一子音が立たないという現象が通時代的に見られることを指摘した。発見として興味深いが、積極的な意義付けが聞きたい。

その他

ここまでの分類に納まらなかった論文から適宜ひろっておく。

片桐洋一「古今集仮名序の文章――その性格と成立――」（『鶴久記念』平成5）は、古今集仮名序に「侍り」が見られず、会話的で「実は～なのだ」という後補的・介入的な性格を持つ「なむ」が用いられている点から、仮名序が宣下者である醍醐天皇に対して書かれたものではなく、第一次奏覧本には仮名序がなかったと推定し、後年の「普及版」に初めてつけ加えられたものではなかったかとしている。

山口佳紀「上代における程度副詞と古事記の訓読」（『国語と国文学』69-3、東京大学、平成4）では、古事記の「甚」字の訓みとして形容詞・形容動詞を修飾する場合には「イト（乙）」、動詞を修飾する場合には「ハナハダ」が適当であることその他を主張している。

柳田征司「希頂周顒講『論語講義筆記』と断定の「ダ」」（『小林記念』平成4）は、新資料を用いて、京都では断定の助動詞として「ダ」が「ヂャ」よりも古く行われていた形であったと推定している。このことと現代の方言分布との関連について述べた論文も準備されているとのことである。

さいごに

今期の動向の一端をキーワード的に表すならば、「テキスト機能、会話機能への着目」「統語構造の明確化」「文法変化の契機としての翻訳語法」等とでもなろうか。力及ばぬことばかりで、何ともまとまりのない展望であったが、私自身にとってはいろいろな発見があって勉強になった。貴重な機会を与えて下さった編集委員会に感謝申し上げたい。なお、資料の収集にあたって小田智将、荻原伸両氏の多大なご助力があったことを記しておく。

――神戸大学助教授――